

阿 山 郡 伊 賀 町

福地城跡発掘調査報告

1 9 8 2

三 重 県 教 育 委 員 会

序

三重県では、昭和49・50年度に国庫補助金の交付を受けて「開発集中地域中世城址分布調査」を実施し、中世城館跡の基礎的資料の作成・刊行を行なってもらいました。この事業は、県民の中世城館跡への関心を高め、文化財保護の一助とすることができました。

その後の調査を加えて、県下には約 1,100ヵ所の中世城館跡が明らかにされております。ここに報告する福地城は、昭和43年にその一部を三重県史跡として指定してきたものであります。今回の名阪国道事務所が計画された側道工事は、史跡の指定地外であるものの城跡の一隅にあたるので、その保護に万全を期するため協議を重ねてもらいましたが、やむなく発掘調査を行ない記録保存に努めることとなりました。調査の結果、戦国時代の福地城の一端を明らかにすることができました。

今後とも、文化財の保護について県民各位の格段の御理解と御協力をお願いする次第であります。

昭和 57 年 2 月

三重県教育委員会

教育長 佐々木 昇

例 言

1. 本書は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局名阪国道事務所と委託契約を締結して実施した名阪国道側道工事事業に伴う伊賀町柘植町所在の福地城の発掘調査結果をまとめたものである。
2. 調査は、次の体制で行なった。

調査主体 三重県教育委員会
調査担当 同事務局文化課 主事 駒田利治
調査協力 伊賀町・伊賀町教育委員会
3. 本書に使用した航空写真・福地城測量図は伊賀町の提供による。
4. 福地城の遺跡標示略記号を9VFTとし、本書に用いた遺構標示は下記の略記号による。なお、方位はすべて磁北を用いた。

S B ; 礎石建物 S A ; 石垣・石列・土壇
S K ; 土 壇 S X ; その他
5. 発掘調査には、伊賀町文化財調査委員村主種次郎氏・中川甫氏から資料の提供を受けた。記して謝意を表する次第である。
6. 付篇は、伊賀町下柘植所在の霊山経塚出土の遺物を記載したものである。遺物の実測にあたっては、柘植公民館長山本昌平氏、霊山寺住職首藤香一氏にはいろいろ御配慮をいただいた。記して謝意を表する次第である。
7. スキャニングによるデータ取り込みため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目 次

I	前 言	1
	1. 調査に至る経過	1
	2. 調査の経過	1
II	位置と歴史的環境	2
III	遺 構	3
	1. 福地城の郭構造	3
	2. 発掘調査区の遺構	5
IV	遺 物	6
	1. 土 師 器	6
	2. 瓦 質 土 器	6
	3. 磁 器	6
	4. 陶 器	6
V	結 語	8
	付篇 霊山経塚の遺物	9

図 版

- P L 1 福地城位置図・福地城地形図
- P L 2 福地城測量図
- P L 3 S A 1 ; S K 4 ・ S A 5 実測図
- P L 4 S A 2 ・ S X 3 実測図
- P L 5 S A 7 ・ S B 8 実測図
- P L 6 遺物実測図
- P L 7 遺物実測図・拓影
- P L 8 福地城航空写真
- P L 9 福地城遠景・福地城全景
- P L 10 大手門石垣全景・大手門北側石垣
- P L 11 調査前近景・調査後近景
- P L 12 調査区全景
- P L 13 S A 2 ・ S X 3
- P L 14 S X 3 ・ S K 4
- P L 15 S K 4 ・ S A 5
- P L 16 S A 7 ・ S B 8
- P L 17 出土遺物
- P L 18 出土遺物
- P L 19 出土遺物
- P L 20 出土遺物
- P L 21 霊山経塚の遺物
- P L 22 霊山経塚の遺物

挿 図

- 第 1 図 遺構全体図と出土遺物分布図
- 第 2 図 霊山経塚の遺物

I 前 言

1. 調査に至る経過

昭和39年に開通した名阪国道は、東海地方と近畿地方を結ぶ基幹道路として上野盆地を東西に通り、伊賀地方の経済的発展の夢が託された道路であった。しかし、一方では道路工事により破壊された埋蔵文化財が数多くあった。福地城もこの例外にもれず、昭和39年に城跡の一部を破壊された。その後、遺構の保存状況の良さや福地氏の伝承により、昭和43年4月16日には、柘植財産区である主郭内部1,828㎡が三重県の史跡に指定された。しかし、この時点では、城跡の範囲も充分確認されてはおらず、主郭以外の部分が民有地であったこともあり、指定地は城跡の中心部に限られた。昭和49・50年度に実施された開発集中地域中世城址分布調査で、福地城跡の城域は丘陵の大半にあたる約52,000㎡にも及ぶことが明確になり、伊賀地方でも有数の規模をもつ城であ

ることが確認された。

ところが、昭和55年名阪国道の側道建設が計画され、昭和55年12月にこの側道工事が城跡の南東部に拡がる腰郭の一部を破壊することが明らかになった。このため城跡の保護について名阪国道事務所と県文化課の間で昭和56年4月15日以来協議を重ねたが、側道工事が地域住民の生活道路として必要であること、側道工事であるため路線変更が困難であることにより、城跡内における道路建設部分にあたる約300㎡について県文化課で発掘調査を実施することになった。

調査は、昭和56年10月26日から12月4日まで行ない、11月29日には現地説明会を開催し約20名の参加を得た。

2. 調査の経過

10月26日 草刈り。地区設定。

10月27日 表土除去。

10月28日 平板測量。表土除去。

10月30日 表土除去。

10月31日 表土除去。

11月4日 表土除去。

11月5日 表土除去・SA1検出。

11月9日 SA2・SX3検出。

11月10日 SA2・SX3検出。

11月11日 SK4・SA5検出。

11月13日 表土除去。

11月16日 表土除去。

11月17日 表土除去。

11月18日 SA7・SB8検出。

11月19日 SA7・SB8検出。

11月20日 検出遺構の清掃。

11月24日 写真撮影・遣り方設定。

11月28日 平板測量。

11月29日 現地説明会。

11月30日 SA1・SA2実測。

12月1日 SA2・SX3実測。

12月2日 SK4・SA5実測。

12月4日 SA7・SB8実測。

II 位置と歴史的環境

伊賀は、四周を山に囲まれた盆地の国である。福地城(121)の所在する伊賀町は、伊賀の北東部に位置し、東は鈴鹿山脈・布引山地で伊勢と境をなし、北は標高約250mの第3紀鮮新世の水口丘陵で近江と境をなす。鈴鹿山脈の一ツ家小平山(標高649.5m)に源を発する柘植川が、その支流とともに形成した河岸段丘上にこの地域は発達してきた。

伊賀町内では、縄文・弥生時代の遺跡はほとんどしられず、小波田遺跡(101)が縄文時代後期の遺跡とされるのと川西地区で磨製石斧が表採されているだけである。古墳時代にはいれば、町内に19基の古墳が確認される。柘植川南岸の丘陵には、5世紀末の須恵器・環頭大刀・勾玉などを出土し、木炭櫛を内部主体としたと伝えられる1号墳を含む天長山古墳群(全2基・4~5)⁽¹⁾、内田古墳群(全2基・2~3)がある。一方、柘植川北岸では、丘陵先端部に築かれ6世紀前半の須恵器・砥石を出土した権現山古墳(73)⁽²⁾がしられ、河岸段丘上には円筒埴輪片を出土した径24mの新堂古墳(6)がある。また、柘植川と支流倉部川にはさまれた台地先端部には、6世紀後半の須恵器・土師器・鉄製品・玉類を出土し、横穴式石室を内部主体とする筒御前古墳(10)⁽³⁾が所在した。これらの古墳は、町内に点在する小規模古墳であり、古墳時代に柘植川上流へと開発が進んでいったことが推定される。

その後、この地域での開発は、条里遺構にみることのできる。この地域は、旧伊賀国阿拝郡に属し、その条里は「19の条」と「7の里」が認められ、その内には大化前代の田積とみなされる古い水田地割も認められるが、条里制施行は壬申の乱後とされる。福永正三氏は、この地域の条里地割を復原し、その阡線はN25°Wの方位をとるとされている。⁽⁴⁾

伊賀国では、東大寺をはじめとする畿内大寺院の進出が著しく、平安時代以降多くの寺領荘園が経営され、この地域でも東大寺北柚とされる玉滝荘、子野荘(東大寺領)・柘植荘(大安寺領)・柏野荘(東大寺領・長講堂領)・壬生野荘(春日若宮領)・河合荘(萬壽院領)などが営まれた。四面廂の掘立

柱建物・倉庫をもつ建物群を検出した的場遺跡(166)⁽⁶⁾は、平安時代末期から鎌倉時代前期にかけて存続した遺跡であり、柏野荘の荘域に含まれると考えられ、柏野荘との関係が注目される。

これらの荘園が隆盛をきわめたのは、平安期を中心とする時期であり、交通上も畿内との結びつきが深い。飛鳥京・平城京・平安京から伊賀を経て東国へ至る官道が開かれた。東国への官道は、北伊賀と南伊賀を通る2つの道があり、伊賀町内はその北方筋にあたる。平城京からは、711年(和銅4)に阿拝郡新居駅(推定地上野市新居)が新設され、木津川沿いに大和から伊賀へ入り、伊賀国庁(推定地上野市印代)を経て柘植川沿いに東進し、加太峠を越えて伊勢に至る道が開かれる。平安京からは、近江甲賀郡から伊賀国柘植郷を経て、中柘植付近で従来の道と合流したと考えられる。886年(仁和2)には、近江国経由の阿須波道が開かれ、伊賀は幹線道からはずされる。伊賀国での頓宮跡に比定されるのが、近江からの道と大和からの道の交点と考えられる中柘植地内の齋宮芝遺跡である。この遺跡では須恵器・土師器が出土しているが、7世紀前半のものであり、頓宮跡とは直接関係のないものであり、齋宮芝遺跡の性格解明は今後の課題である。⁽⁷⁾

中世に至れば、荘園体制の弛緩に伴い在地領主層の動きが活発となり、その拠点として城館が築かれた。伊賀では、約500ヶ所の中世城館が確認されており、その分布は一定地域に遍在する傾向がある。柘植川流域も多く城館が築かれた地域であり、伊賀町内では川西、川東、新堂、下柘植、中柘植、倉部、小杉地区で特に集中している。これらの城館は、集落内や集落の後背丘陵に位置し、一辺数十メートルの土塁で囲まれた単郭もしくは複郭程度の単純な郭構造をもつものが多い。これらは、戦国時代以降の構築と考えられ、恒岡氏城(阿山町156)のように天正伊賀の乱に際して構築されたものもある。柏野城(70)・壬生野城(48)は、ともに天正伊賀の乱の伊賀勢の拠点となった城である。⁽⁸⁾

III 遺 構

福地城の所在する伊賀町北東部の柘植川南岸は、霊山の北麓にあたりよく開折された丘陵が北方に伸びている。福地城は、これらの丘陵の一つに築かれたものであり、標高 250 m 前後の丘陵先端部に位置し、丘陵北方の水田面との比高は 30 m ほどある。この丘陵は、西方向に伸びその南北には深い谷がはいりこんでおり、福地城は天険の地を効果的に利用した中世城館の特徴をよく示している。城跡からは、

北方への眺望にすぐれている。この北方は、柘植川を界して旧東海道が東西に通い、この旧東海道に北から近江の甲賀からの街道が交わっている。従って、この地は、伊勢・伊賀・近江を結ぶ交通上の要所でもあった。また、城跡の西方 200 m には、南を除いて三方に土塁をめぐらす一辺 50 m の方形の山出城（163）が築かれ、福地城の出城とも考えられる。

1. 福地城の郭構造

福地城は、丘陵頂部に築かれた郭群と丘陵裾の郭に大別され、機能的には前者が「詰の城」後者が平素の「館」にあたる。このように、城と館が分離した形態をもつものは、有力な国人領主階層によく認められる。

城は、丘陵との接続部を名阪国道に破壊されているので、城の背後に伸びる丘陵をどのように限っていたかは明瞭でない。地形図によれば、背後の丘陵には二つの小谷がはいりこんでおり、この谷が自然の堀の役目を果たしていたことが推察される。また、名阪国道施工以前には、二つの郭と二つの井戸があったと言われる。城の中腹には町道がつけられ、城の一部が破壊されるが、城を構成する郭はほぼ旧状をとどめている。

城は、丘陵頂部に位置する主郭 I と丘陵斜面に築かれ主郭をとり囲む郭群で構成される。主郭 I は、東西 22~32 m × 南北 53 m の長方形をなし、北部分の東西幅は狭い。大手門は、西辺中央南寄りに開かれ、平面形は枡形とならない。しかし、大手門は、この時期の城館には数少ない石垣を用いる。大手門中央には、礎石がのこされ門扉の存在が推定されている。大手門両側の土塁は、他の部分より僅かに広く、ことに南土塁は 6 × 9 m の範囲で 0.5 m ほど高くなっており、土塁隅にあたることから隅櫓あるいは渡櫓の構築物が想定される。主郭 I は、四辺を上面幅 4 ~ 5 m ・高さ 3.5~4.8 m の土塁で囲まれる。北辺土

塁の東隅には、3.5 m × 4 m の石室がつくりこまれる。主郭内の北西隅には、径 1.5 m の石組井戸がのこる。主郭の西及び北には大きな空堀がある。西の空堀は、大手道の南北で規模を違え、北部分で上幅約 20 m ・深さ約 2 m （郭 III から）～約 10 m （主郭土塁から）・底部幅約 4.5 m である。南部分では、上幅約 10 m ・深さ約 2 m （郭 IV から）～約 7 m （主郭土塁から）・底部幅約 2.5 m である。北の空堀は、郭 II の南を通り東に位置する郭群（VI~IX）へ通じる堀切道となり、南の空堀も郭 V ・ XI へ通じている。また、主郭東辺裾にも上幅約 3 m ・深さ 0.5 m ほどの小規模な堀がある。

丘陵斜面には、11 以上の大小の郭が同心円状に主郭をとり囲み、階段状に築かれる。

郭 II は、城の北西隅に位置し不整形な郭である。しかし、主郭をとり囲む諸郭は土塁を築かないのが多いが、郭 II だけは上面幅約 1.5 m ・高さ 1 m 前後の土塁を巡らしている。郭内面積は、760 m² で現存する郭の中では主郭に次ぐ規模をもつ。

郭 IV は、城の南西に位置する東西 23 m × 南北 27 m の長方形の郭である。郭の北西部が一段高くなっており、主郭の土塁を除いて城の中で最も高い郭である。

郭 III は、郭 II と郭 IV の間に位置し、主郭西の空堀の土塁としての機能をもつ。大手道に面する南端には石塁が築かれる。

郭Ⅴは、主郭の南に位置し、東西30m以上・南北20mの大きさをもつが、東側は既に破壊されており不明である。郭の西端からは、主郭の空堀と郭Ⅺへ通じ、この地点に小さな土塁が築かれ、主郭土塁裾に井戸がある。

郭Ⅵ～Ⅸは、城の東部に位置し、高低差の少ない郭である。郭Ⅵは、その大半が破壊されているためその全容は不明である。郭Ⅶは東西16m×南北21m、郭Ⅷは東西18m×南北19mである。郭Ⅵと郭Ⅶの西側の主郭裾には幅3m・深さ0.5mの小さな堀がある。郭Ⅵと郭Ⅶは、高さ1.5mの土壇となるが、郭Ⅶと郭Ⅷは高さ約1mの石垣で区切られる。また、郭Ⅷの南部には、径1mの石組井戸がある。郭Ⅸは、幅13mの弧状をなす郭であり、主郭空堀の延長部にあたる。郭の北西隅には、城外に通じる小径がある。

郭Ⅹは、城の西部に位置する約15m×約40mの不整形な郭である。郭の南端には、高さ約2mの土塁が築かれる。この郭には、城の南と北からの通路が交差する。

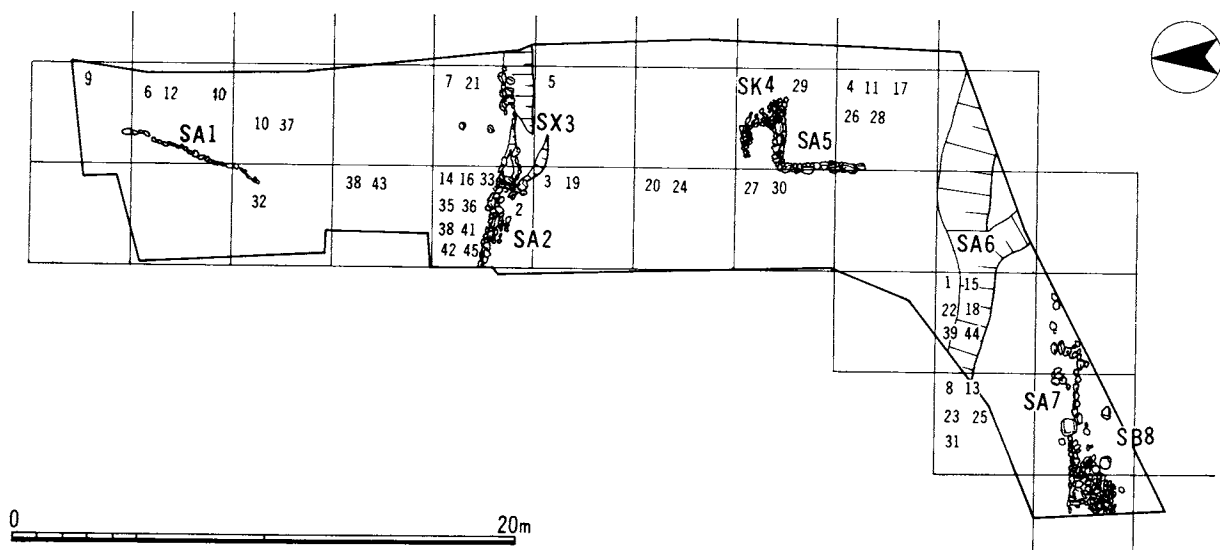
郭Ⅺは、城の南端に位置し郭Ⅳの下にある。東西37m×南北14～20mの略方形をなす。

郭Ⅻは、城の西端に位置する。中央部に町道がつくられて分断されているが、東西約15m×南北約70mの細長い郭であったと思われる。中央部に、主郭に通じる大手道がつけられる。郭Ⅻの斜面は、比較的緩やかであり、この西方下に館Ⅻが築かれる。

館Ⅻは、丘陵西端部に位置し、主郭との比高差は

約30mある。館は、主郭と方向をほぼ同じくし、東西31～36m×南北約65mの長方形をなす。館は、現在南以外の三辺に土塁・堀が残るが、南辺での等高線・地割から土塁・堀が四辺をとり囲んでいたことが知られる。土塁は、上面幅4～5m・高さ1.5～4mの大きな土塁であり、ことに東土塁は西土塁より規模が大きい。なお、東土塁中央部は後世に破壊されたものである。空堀は、上幅約7m・深さ5～7m・下幅約2mである。南及び西の中央部で池と結ばれており、本来水濠であったと推定される。郭の南側は谷状地形となるが、西及び北側は丘陵端部にあたり、比較的平坦な地形となっており、館の一部として機能していたのかもしれない。とくに館の外側北東部は、石垣が部分的にのこされ、変形した枡形をなしているのが福地城の大手かと思われる。

現在、福地城への出入は、城の南西部の郭Ⅺの西側に設けられた石段を登り、郭Ⅹを経て主郭へ通じている。郭Ⅹの南端にある土塁の存在は、この通路の有効性を認めさせるが、城の規模・郭構造から考えて貧弱すぎる感があり、大手口は他に求めた方がよいであろう。福地城では、石垣が部分的に用いられ、その大半が主郭の大手門付近にある。更に郭Ⅲの南西端裾にも石垣が用いられ、しかもこの部分が枡形をなしていることから、大手道は郭Ⅹで北へ折れ、郭Ⅻを経て郭Ⅻの変形した枡形部分へ通じていたと推定できる。ただ郭Ⅻの西方斜面には、道と判断できる地形が認められず、問題は残る。



第1図 遺構全体図と出土遺物分布図(1:300)

2. 発掘調査区の遺構

今回発掘調査を行なったのは、残存する郭Ⅵ全域及び郭Ⅶ・Ⅷの東端部の約300㎡である。遺構は、礎石建物1棟、石列・石垣4の他階段・石組遺構などがある。遺構は、SA2やSA5のように調査前からその上部が露出していたものもあるが、表土層を約10cm除去して検出したものが多く、遺物も表土層下部で出土することから、この面が生活面と判断できた。しかし、遺物の一部がこの高さ以下で出土することもあったので、全体に数cm掘り下げた。その結果重複する遺構も存在せず、検出された遺構はほぼ単一時期のものと思われた。郭Ⅶ・Ⅷに設定したトレンチにより、この両者の郭は丘陵斜面を削り出して削平されたものと判断できる。おそらく郭Ⅵも同様な普請を行なったものであろう。

1. 礎石建物

SB8 郭Ⅵの石列SA7の内側で検出された。長径40～50cmの礎石2個のみで断定はできないが、建物としておく。棟方向は磁北を示し、柱間は2mである。

2. 石垣・石列・土壇

SA1 郭Ⅷの北部で東の斜面肩から2.5m～3.5mの地点で検出した石列である。石列は、人頭大の河原石を一段一列に並べたもので、全長5.7mを測る。石列の西側は郭内となり、一段高くなることからこの石列は東側を通路とするための仕切石と思われる。

SA2 郭Ⅶと郭Ⅷを限る石垣である。中央部に階段SX3をもち更に東へ続くが、階段以東は石垣は下部の二段しかのこらない。石垣は、幅約1.2mの掘方を二段に掘り高さ1.2mまで石を積み上げる。石は大小のもの用いるが、大きな石を最下部に横積みし、中小の石をその上部に小口積みする傾向があ

る。また、裏詰めは挙大の石を用いるが多くはない。

SA5 郭Ⅶの南東部に位置する。北及び西の二辺のみに築かれた鍵形の石垣である。北辺は長さ2.5m・西辺は長さ3.4mで、ともに高さは0.8mである。長径30～40cmの石を用い、最下部は横積みし二段目以上を小口積みする。郭Ⅶの南東部に一段低い空間地を限る石垣と思われる。北辺北側に石組遺構SK4を併設するが、周辺に他の遺構はない。

SA6 郭Ⅵと郭Ⅶを限る土壇である。高さ約1.3mで東部で0.4mほどの段をもつ。郭Ⅵと郭Ⅶを結ぶ通路は不明である。

SA7 郭Ⅵで検出され、SA6の北端と約4mの距離をおいて併行する石列である。東西に並ぶ石列は、中央に位置する長径約60cmの平坦な石を境にして段違いになる。西側で3m、東側で3m以上続くものと思われる。人頭大の石を一段横積みする。西側石列の内側には石を一段及至二段敷きつめた部分があり、東側石列の外側には入口の施設かとも思われる二列の石列がある。なお、石列内側には礎石建物と推定されるSB8があり、SA7はSB8を含めた屋敷を限る機能を持ち、その北側は通路とされたのであろう。

3. 階段・石組遺構

SX3 SA2の東部分で検出された郭Ⅶと郭Ⅷを結ぶ階段である。検出状況は、良いとは言えないが、三段の段を確認した。一段及び二段の端部には石が貼り付けられる。階段の幅は、西端は明瞭であるがSA2東部分の保存状況が良くないので断言できないが1mほどのものと思われる。

SK4 SA5の北側に併設されたもので、「コ」字形に石を巡らしている。東西1.3m×南北0.8m。埋土は、表土層と同じであり、出土遺物もない。

IV 遺物

出土遺物には、土師器・瓦質土器・磁器・陶器の土器類ほかに銭貨・法螺貝がある。量的には、信楽・伊賀焼の鉢類及び瀬戸地方産の天目茶碗が多い。遺物は、地山直上で出土し明確な遺構に伴うものはない。なお、出土地点は、第1図にPL6・7の遺物番号で示したとおりである。

1. 土師器

鍋(1~3) 口縁部が大きく外方へひきだされ、口縁端部でおり返される。端部が直立するもの(1)と外方へ開くもの(2・3)がある。1は、口径36cm前後で、頸部以下の外面をやや粗いハケで調整する。1~3ともに、器壁は薄く仕上げられ、胎土には砂粒を含まない。褐色を呈し、外面に煤が付着する。いずれも小片である。

羽釜(4) わずかに内傾する口縁部に、短い鏝が水平にはりつけられる。口縁端部は、内傾する面をもつ。口縁部は、内外面ともナデ調整され、鏝以下の外面は、ハケ調整された痕跡をのこすが明瞭でない。胎土にわずかの砂を含む。淡褐色を呈し、鏝以下の外面には煤が付着する。

2. 瓦質土器

皿(5) 口径14.5cm前後・器高2.1cm。底部を欠く。わずかに外傾する口縁部は、端部で丸くおさめられる。底部と口縁部の境は面取りされる。胎土に細砂を含み、黒灰色を呈す。

香炉(6) 口径14.8cm・器高5.0cm。わずかに内湾して外傾する体部は、口縁部端部で強くおり出される。口縁部内外面及び体部外面はヨコナデされ、体部内面はナデ上げられる。三足のものであろう。体部外面中央には、2cm間隔で花文を印刻する。細砂を含み黒色を呈する。

羽釜(7) 口径12cm前後の小形品である。内湾する体部上部には、短く水平に伸びる鏝がはつりけられる。口縁端部は、直ぐつまみ上げられる。体部内面はオサエのみで仕上げられ、指圧痕をのこす。口

縁部内外面及び体部外面はヨコナデされる。細砂を含み黒色を呈す。

3. 磁器

白磁碗(8) 口径19cm前後と推定。外傾する口縁部は、端部で外方へひきだされ、丸くまとめられる。

染付碗(11) 口径14.8cm・器高5.8cm。ゆるく内湾して開く器壁は均一である。口縁端部は、わずかに面をもつ。断面台形の高台は直立する。外面及び内面底部に染付される。

染付皿(9・10) 9は口径10.0cm・器高2.5cm、10は口径12cm・器高2.6cm。ともに内湾ぎみに開く体部は、口縁端部で水平にひき出される。高台は、断面長方形に近く、体部の高さに対して比較的高いものである。外面及び内面底部に草花文を染付する。

4. 陶器

皿(12~15) 12・13・15は灰釉の皿である。12は口径11.6cm・器高2.4cm、13は口径11.0cm・器高2.9cm。内湾して開く体部は、口縁端部でひきだされる。12は、断面逆三角形の高台をもち底部外面に窯道具が焼付く。13は、断面方形の高台をもつ。12は淡緑色、13は乳白色を呈する。15は底部のみであり、底部内面に浅い菊花文を印刻する。淡緑色を呈する。

14は、鉄釉小皿である。口径10.3cm・器高2.1cm。体部は、ほぼ直ぐ外傾して開く。内面には重ね焼き痕をのこす。底部外面以外に鉄釉を施す。

天目茶碗A(16・17) 体部が大きくすぼまり、口縁端部の屈曲が大きく直立気味のをA類とした。16は、口径11.5cm・器高6.2cmで高台を欠く。口縁端部は、直立気味につまみ上げられ、端部が外方へひきだされる。17は、口径13cm前後。口縁部のつくりは16に類似するが、体部はやや丸味をもつ。

天目茶碗B(18・19) 口縁部の屈曲が弱く、斜外方に開くものをB類とした。口径は、18で13cm前後19で12cm前後。

天目茶碗C(20) 口縁部が殆ど屈曲をもたないも

のをC類とした。20は、口径9.5cmの小形である。口縁部直下でわずかにおさえられ、端部は丸くまとめられる。体部はやや丸味をもつ。

21は、天目茶碗の高台であり。底径4.6cm。畳付部は水平に、底部外面はゆるい曲線状に削り出される蛇の目高台である。

捏鉢 (22・23) 22は伊賀焼、23は常滑焼である。22は、底径15cm前後と推定されるが底部中央部を欠く。内面は、磨耗して滑らかになっているが、筋目をもたない鉢である。ロクロ挽きのままである。5mm前後の砂粒を含み、暗褐色を呈する。

23は、口径28cm前後と推定される。体部は外傾し、口縁部は肥厚する。口縁端部は内面で直立し、外面に二条の沈線状の凹みをもつ面をもつ。

播鉢B₁ (24) 赤褐色を呈し硬く焼き締められたもので、筋目の分割数も20区画程の播鉢をB類とし、口縁直下1cmに軽い段をもち、口縁端部が内傾する面をもつ播鉢をB₁類とした。24は、口径27.8cm。筋目は一単位6条でやや細かい。

播鉢B₂ (25~33) B類のうち、口縁端部が強くおさえられ、段をもち外上方へひきだされたものをB₂類とした。器形には大小のものがあり、かなりの個体差が認められるが、口径28~30cmのもの(26~28)と口径32~36cmのもの(25・29~31)に大別できる。ともに一単位5条の筋目をもつ。内面を13で21分割、33で20分割しており、他のものも20分割ほどと推定される。体部は、ロクロ挽きのままであり、直ぐ外傾するものが大半であるが、わずかに内弯気味のもの(27・29)もある。口縁端部は、ヨコナデされる。26・30では口縁端部を指で押さえ片口鉢の形状をのこしているが、他のものも同じ形状を成すであろう。また、26の底部外面には「下駄印」とよばれる高さ3mmほどの棒状の突起をもつ。播鉢下半は、よく使用され筋目まで磨耗したものが多い。すべて、赤褐色を呈し、多少の砂を含むが、硬く焼きしめられる。すべて伊賀焼である。

播鉢C (34) 施釉された播鉢をC類とした。34は、口径38cm・器高16cm。直ぐ開く体部は、口縁端部で

外上方へおりだされる。体部は、ロクロ挽きのままであり凹凸が多いが、口縁部は内外面ともヨコナデされる。底部外面は不調整である。底部外面以外には、暗茶色の施釉がなされる。

深鉢A (35) 水指に用いられたと思われる。口縁部の形態により3つに分類した。体部から直ぐ伸びてきた口縁部をもつものをA類とした。35は、口径29cmと推定され、口縁端部はわずかに凹んで内傾する面をもつ。赤褐色の信楽焼独特の発色をする。

深鉢B (36~38) 口縁端部が水平方向に短く引き出され、ほぼ水平な面をもつものをB類とした。口径は、36で20cm前後、37で25.6cm、38で28.6cmである。ともに砂を多少含み暗褐色を呈する。

深鉢C (39~40) 口縁端部は、B類同様短く水平に引き出されるが、内傾する面をもつものをC類とした。39は、口径31.4cm・器高22.4cmでロクロ水挽きされた体部は凹凸をもちながら外傾して開く。砂を多少含み、淡茶色を呈する。40は、口径24cm。ロクロ水挽きされた体部は外傾して開き、口縁部で肥厚する。砂を多少含み、暗褐色を呈する。

壺A (41・42) 短い口頸部をもつものをA類とした。41は、口径19cm前後で、直立気味の短い口頸部をもつ。口頸部は、ヨコナデされ端部でわずかに肥厚する。細砂を含み褐色を呈する。42は、口径16cm、器高は20cm前後と推定される。外傾する口頸部は短く、外上方に面をもつ。砂を多少含み暗褐色を呈する。口頸部と底部は接合不能だが、同一個体と推定。

壺B (44・45) 大きく外傾する口頸部をもつものをB類とした。口径は、44で15.8cm・45で18.4cm。ともに口縁端部で肥厚し、丸味ある端面は外上方を向く。細砂を多少含み、赤褐色の施釉が施される。

甕 (43) 口径35~43cmと推定される。ロクロ水挽きされた体部に、ゆるく外弯する口縁部をもつ。口縁部は、わずかに肥厚し、内面に軽い段をつくり、外面に面をもつ。砂をあまり含まず、焼成は比較的甘く軟質である。淡茶色。

以上の遺物の他に、壺あるいは甕の底部が数点と文字の判読不能な銭貨1枚、法螺貝の一部がある。

V 結 語

福地城は、丘陵先端部に築かれ、館と城の機能が分化した中世城館である。規模は、東西 260 m×南北約 200 m の約 52,000m²にも及び、伊賀地方屈指の大きさをもつ。伊賀地方の城館の多くが、小規模なものである中であって、福地城は規模・構造で卓越している。

城の郭配置は、主郭を中心として大小の郭を地形の起伏を利用して同心円状に築いている。今各々の郭の機能は明らかにしがたいが、郭Ⅱのように近世城郭の二之丸に相当する郭も認められる。郭Ⅳは、諸郭の中で最高所に位置することから物見の機能をもつ郭と考えられる。また、この地域の中世城館でも石垣を用いることは少なく、戦国時代の築城法をとり入れていると言えよう。更に、大手道にみられる枡形も戦国時代に発達すると言われることから、現存する遺構は戦国時代後半のものと考えられる。

出土遺物では、伊賀地方の他の中世城館と同様な器種構成が認められる。即ち、調理形態には伊賀焼播鉢・捏鉢、貯蔵形態には伊賀焼水指・壺・甕、煮熱形態には土師器鍋・羽釜・瓦質土器があり、供膳形態には天目茶碗・染付碗・白磁碗の碗類と灰釉皿・鉄釉皿・染付皿などの皿類があり各種の土器で構成される。これらの遺物は、中世後期の特徴をもち播鉢B類が主体をなすことから16世紀を中心とするものであろう。⁽¹¹⁾

以上のように郭構造・出土遺物を検討してみると福地城の存続時期は、16世紀を中心とした時期が求められる。然るに、福地城の城主と伝えられる福地氏の文献上の初見は、『満濟准活日記』正長二年(1429)二月十六日条に「伊勢国人ツケ三方ヘキ・北ムラ・福チ也。」とある。⁽¹²⁾この時期における各々の城館は未確認であるが、伊賀町内に所在する城館跡の中で、ヘキ氏には日置氏と考えられ、日置城(下柘植字畑山・109)及び日置氏館(愛田・102)が比定される。北ムラ氏には、北村氏山城(中柘植字東畑・129)・北村氏山城(中柘植・171)が比定されている。また、福地氏の城館は、福地城以外に

福地氏堡(上村字城の越・城の東)が伝えられる。これらの城館のうち、郭構造・規模が判明してしている日置城・北村氏山城及び北村氏里城は単郭ないしは、単郭に帯郭がとりつく単純な郭構造を示しており、ともに中規模のものであり、福地城とも規模の差が大きすぎる。この差異は、伊賀柘植国人三方の消長の反映とも解せられる。今回の調査で出土した遺物には、正長二年(1429)の15世紀前半に比定される遺物はない。従って、今回調査した郭群は、16世紀を中心とする時期のものとしか捉えられない。城館の改築も考慮すべきであろうが、本城の郭構造は戦国時代の様相を示しており、伊賀国人柘植三方の一人として活躍した時期の福地氏の城館は、現存する本城以外に求めるべきであろう。

考古学的に城館主を決定し得る遺構・遺物は皆無に等しく、また伊賀地方のように一村里に複数の城館跡が分布する場合には、文献史料をもって比定するのも容易でない。福地氏城の場合、『伊水温故』⁽¹³⁾に「福地伊予当国の戦に信長に与し、天正9年当国先となる。其前、定成千石の熟田を所持す。一国にての福人也」と伝えられており、この状況から福地氏城主を福地伊予に比定することは可能であろう。

ただ、15世紀前半の史料に現われる福地氏と福地伊予の関係や福地氏隆盛の過程を解明することは、当地城の戦国時代を解明するうえで今後にのこされた大きな課題である。

註

- (1) 森浩一・石部正志 「古墳文化の地域的特色」5 畿内およびその周辺」・『日本の考古学』Ⅳ 1966
- (2) 吉水康夫 「権現山古墳出土の遺物」・『筒御前古墳発掘調査報告』1977 伊賀町教育委員会
- (3) 吉水康夫 「筒御前古墳発掘調査報告」1977
- (4) 粟原治夫 「条里制施行の一形態——伊賀国阿拝郡の場合——」・『日本古代史論集』下巻 1962
- (5) 福永正三 「古代の伊賀町——柘植郷条里とその復元——」・『伊賀町史』1979 伊賀町教育委員会
- (6) 駒田利治 「的場遺跡発掘調査報告」1978 伊賀町教育委員会
- (7) 吉水康夫 「齋宮芝遺跡出土の遺物」・『筒御前古墳発掘調査報告』1977
- (8) 新田洋・山下雅春 「恒岡氏城跡発掘調査報告」1981 三重県教育委員会
- (9) 伊賀町文化財調査員村主種次郎氏の御教示による。
- (10) 播鉢の分類は、「上野市大野木 神ノ木館跡」『昭和54年度県営園場整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告』1980 三重県教育委員会 で用いた分類による。
- (11) (10)に同じ。
- (12) 「伊勢(河)国人ツケ三方ヘキ。北ムラ。福チ也。就関御退治可被成御教書之由可申管領旨被仰出了。(以下略)」
- (13) 菊岡如幻『伊水温故』1687

付篇 靈山経塚の遺物

靈山経塚は、標高 765.8 m の靈山山頂に造営された経塚群であり、行政上は伊賀町下柘植字堂山に属する。山頂は靈山寺奥ノ院にあたり、石室内におさめられた聖観音立像や 4 基の宝篋印塔が安置されている。聖観音立像の台石に使用されている宝塔には、永仁 3 年（1295）の銘がある。そうして、これらを取り囲むようにように土塁がめぐっている。

経塚は、昭和 27 年（1952）にテレビ放送中継所建設工事により、土塁の東北外側で三基が発見された。このため地元識者らによって応急の調査が行なわれ、その内容は石部正志氏の「三重県靈山経塚」（『先史学研究』1号）に詳しくのべられている。⁽¹⁾ 経塚の構造は、四周を石で積みあげられた小石室内の中央に経巻容器である壺を中央に安置し、その周囲に和鏡や刀の供養物をおき、平石で蓋をし、更にその上におもしの石をのせていたと言われる。

出土遺物には、和鏡・鉄製品・土器類があり、その詳細は次のようである。

和鏡

菊花双鳥鏡 2 面・秋草文双鳥鏡 1 面・松喰鶴鏡 1 面・唐草文双禽鏡 1 面・他 2 面

鉄製品

大刀・短刀・鉄鏃

土器類

信楽焼壺・練鉢・青磁椀破片・青磁小壺・青白磁小皿・青白磁合子蓋片・青白磁合子身・瓦器椀小片
土師質小皿

これらの遺物は、既に『先史学研究』1号に報告されているが、同書が入手しにくいこともあり、今回その所在が明確なものを再録した。

遺物は、工事発見という経緯もあり、現在靈山寺・柘植公民館の 2 ヶ所に分割して保管されている。靈山寺には、菊花双鳥鏡 1 面・秋草文双鳥鏡 1 面・松喰鶴鏡 1 面・青白磁合子身 1 点が保管される。⁽²⁾ 柘植公民館には、菊花双鳥鏡 1 面・短刀片・鉄鏃片・信楽焼壺 2 点・土師器小皿 1 点・青白磁小皿 2 点・青

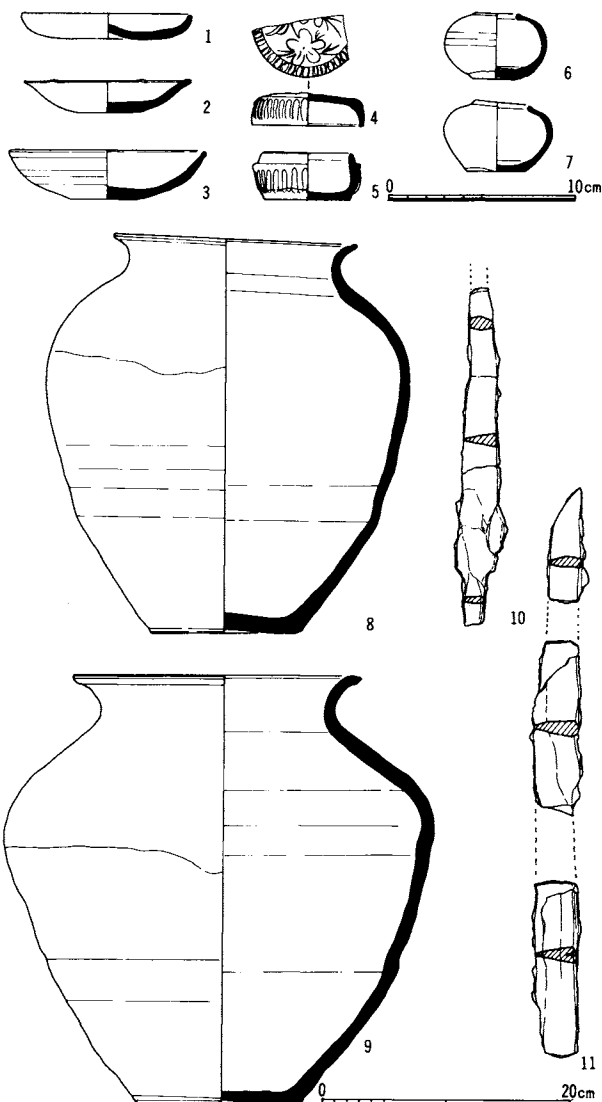
白磁合子蓋 1 点・青磁椀片 1 点・青磁小壺 3 点が保管されている。

土師器小皿（1）

口径 9 cm・器高 1.5 cm。口縁部は直立気味で、体部は丸味をもつ。底部中央は強くおさえられ内側に突出する。口縁部及び体部内面はヨコナデされる。茶褐色を呈し、細砂・金雲母片を含む。

青白磁皿（2・3）

2 は、口径 9.5 cm・器高 1.8 cm の輪花皿である。輪花は 6 ヶ所に認められる。僅かに内弯する体部は、口縁端部で水平に引き出される。底部は、僅かにあ



第 2 図 靈山経塚の遺物
1~7 (1:4) 8~11 (1:6)

げ底となる。底部外面には、白色の強い釉が施される。

3は、口径10.5cm・器高2.6cm。大きく内湾する体部は、口縁端部で僅かに玉縁状となる。底部は、口径に対して小さく、僅かにあげ底となる。底部外面以外に不透明乳緑色釉が施される。

青白磁合子（4・5）

4は、口径6.0cm・器高1.8cm。直立気味の口縁部は、口縁端部で内側に僅かに肥厚し、水平な面をもつ。天井部に花文・体部に蓮華文を施す。

5は、口径4.7cm・器高2.5cm。僅かに内湾した体部は、口縁部で内傾し、内面に面をもつ。体部の蓮華文は比較的厚い。蓮華文以下は、施釉されず露胎となる。

青磁小壺（6・7）

6は、口径2.4cm・最大径5.5cm・器高3.5cm。体部は丸味をもち、口縁端部で肥厚し短い頸部をつくる。底部は、あげ底となる。外面に乳緑色半透明釉がかかる。

7は、口径2.8cm・最大径5.9cm・器高3.5～3.75cmのやや歪みをもつ。体部は丸味をもち、口縁端部は僅かに肥厚して上方へ引き出され、短い頸部をつくる。外面に暗灰緑色の施釉がなされる。

他に、同様な形態をなすと思われる小壺の底部破片が1点ある。

信楽焼壺（8・9）

8は、口径22.6cm・器高34.5cm・底径13.5cm前後。口縁部は、大きく外反し端部が水平に引き出され、口縁端部上面に低い段をつくる。体部は、やや肩が張る。底部は、僅かにあげ底となり未調整のままである。体部は、器面に凹凸をのこす。また、底部から½ほどの高さに接合痕をのこす。頸部から肩部にかけては、暗茶緑色の釉がかかる。

註

(1) 石部正志 「三重県霊山経塚」 『先史学研究』 1号1959

(2) 遺物の数量及び保管場所は、(1)や『伊賀町史』 1979で報告されて内容と異なり、遺物の保管には若干の移動があったものと思われる。なお、上野市文化財専門委員 山本茂貴氏の御教示によれば、上野市図書館に鏡二面が保管されるという記述は誤りであり、鑑定のため一時的に保管したと言われる。

胎土に砂を含み、暗茶褐色を呈する。

9は、口径19.8cm・器高31.3～32.1cm。直立する短い頸部に外反する口縁部が広がる。口縁端部内面には一条の浅い沈線がめぐり、体部は、撫で肩の肩部をもつ。底部は、僅かにあげ底となる。体部中央部以下は、下方に向ってヘラケズリされる。口頸部は、ヨコナデで仕上げられる。口頸部から肩部にかけては、淡緑色の施釉がなされる。胎土に細砂をかなり含み、暗茶褐色を呈する。

短刀（10）

10は、現存長27.2cmの短刀と考えられるもので、切先および茎の端部を欠いている。刃部は、銹化が進行しておらず、比較的保存状態は良い。刃部の最大幅3.0cm、刀背0.9cm。茎には、銹のため目釘穴は認められない。幅1.8cm・厚さ0.6cm。

大刀（11）

大刀刃部の破片が3個体ある。切先は、かなり鋭く、刃部幅2.7cm・刀背0.8cmである。刃部は、銹化が進行しているが、刃部の最大幅3.5cmのものと思われる。

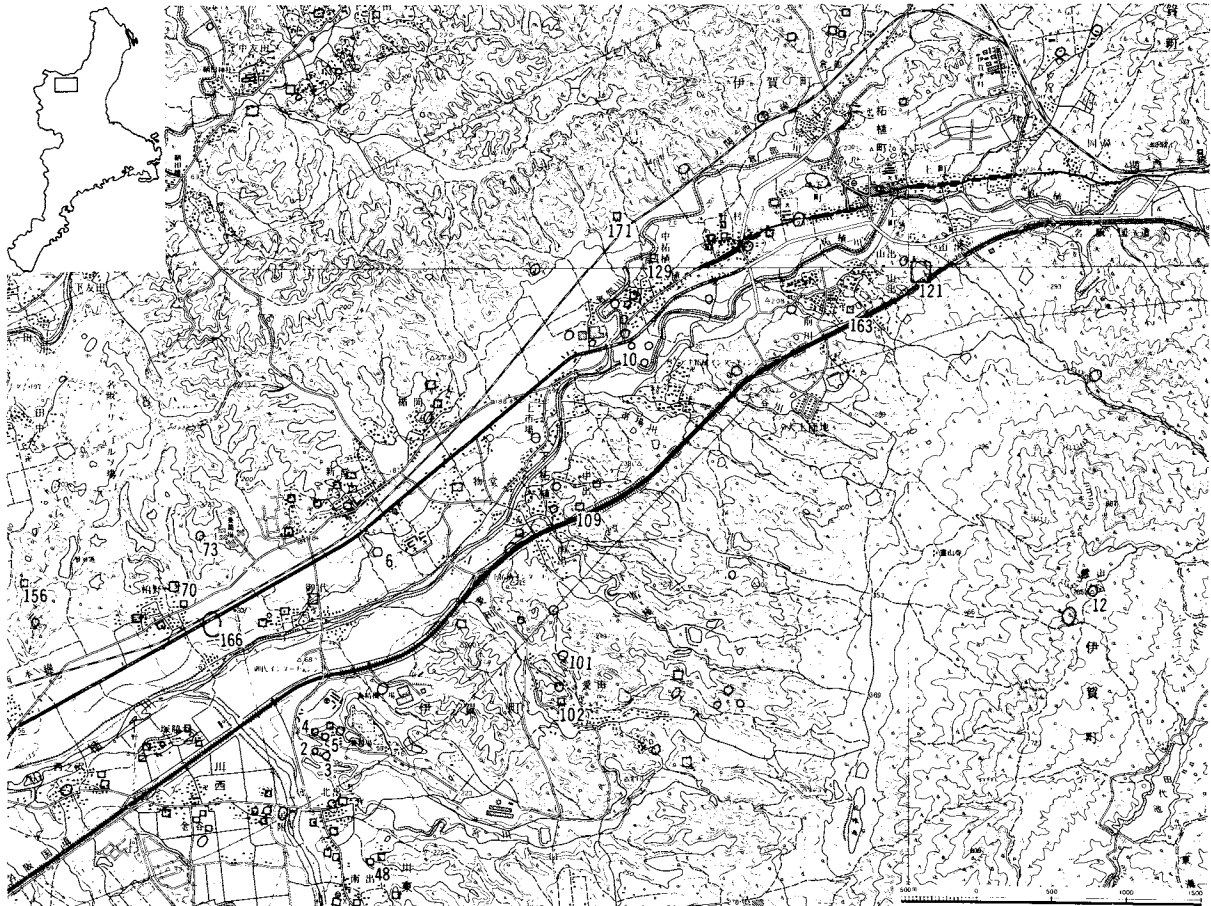
鏡（12～15）

12・13は、菊花双鳥鏡である。12は径11.6cm、13は径9.9cm。12は、捩菊の鈕座を中心に小鳥が配され、圏線の内外に菊花をめぐらしているが、銹のため細部は明瞭でない。13は、大きな推菊を鈕座の対角線上に配し、推菊は圏線にもかかる。推菊の間に同一方向に飛ぶ二羽の小鳥を配している。

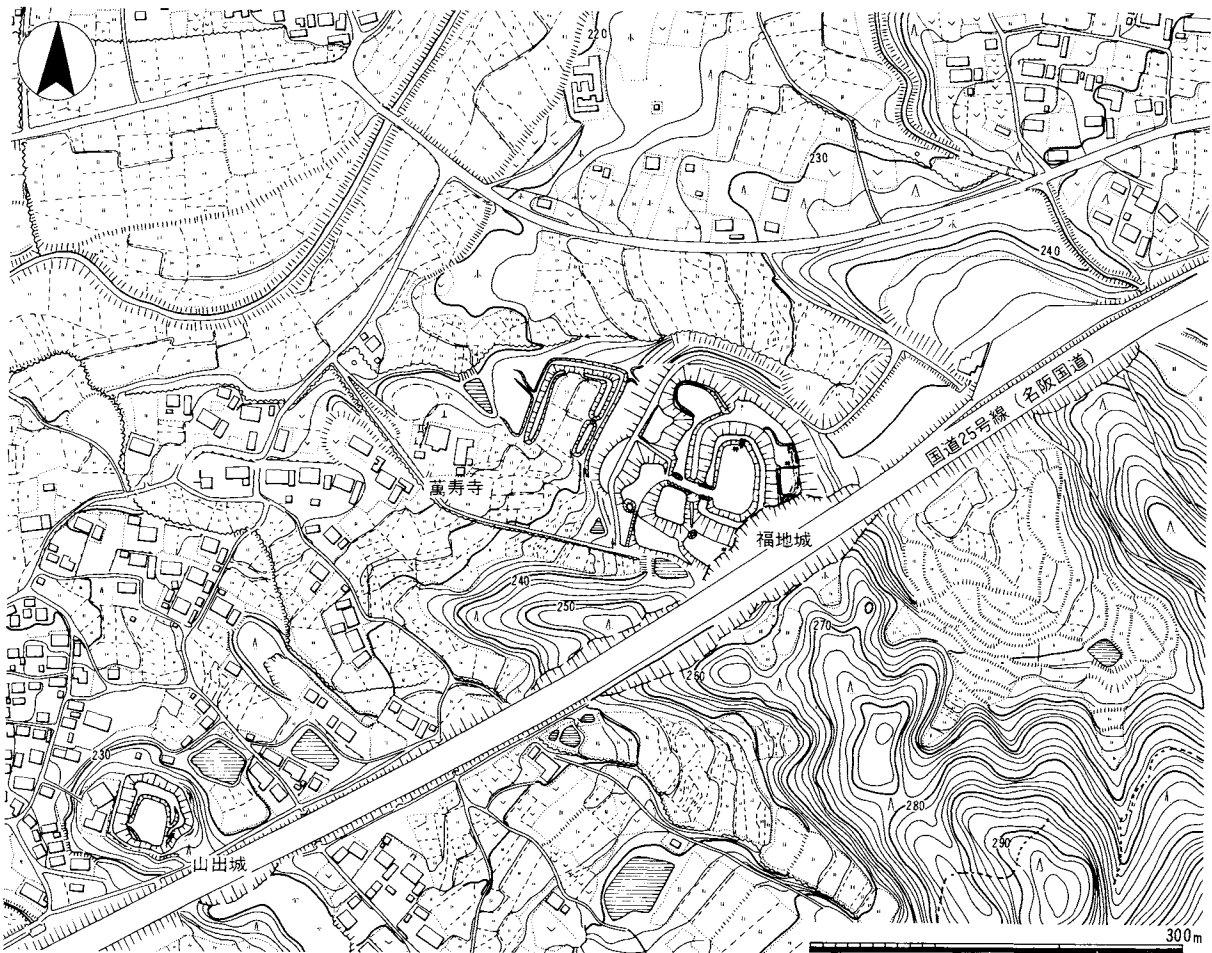
14は、松喰鶴鏡と思われるが、銹のためあまり明瞭でない。口径9.8cm。現在二つに破れている。

15は、口径8.2cmの秋草文双鳥鏡である。縁は、蒲鉾型をなし、圏線をもたない。縁部を半分ほど欠損する。圏線状にまわる薄の内側に小鳥を配する。

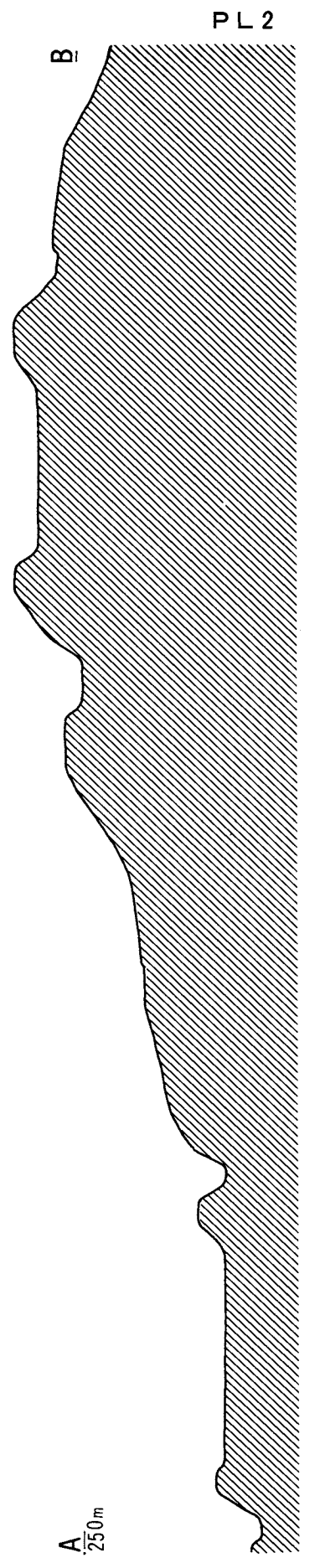
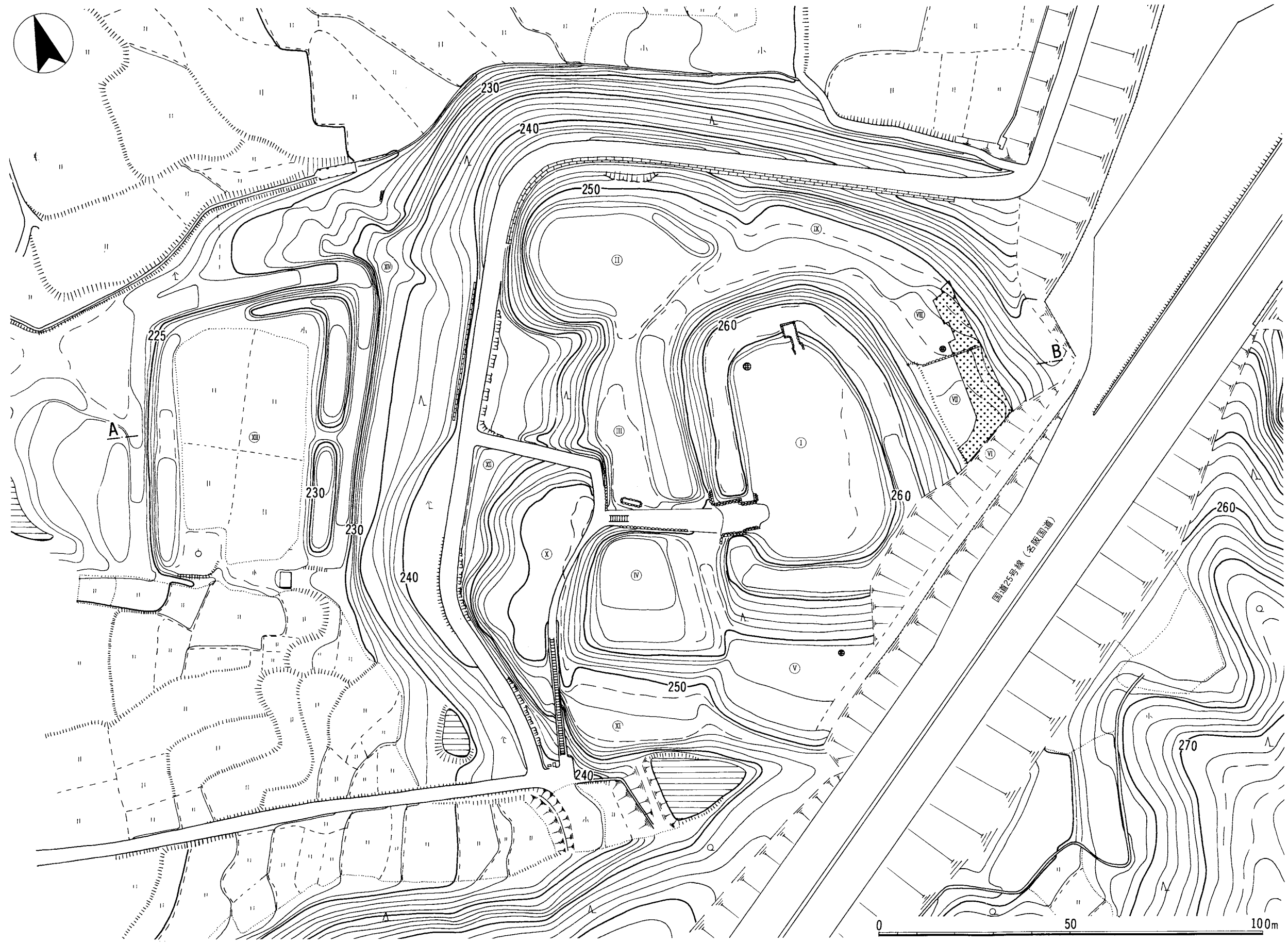
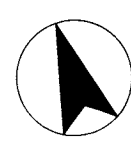
図 版



福地城位置図 (1 : 50000 国土地理院 上野・甲賀・平松・鈴鹿峠) □印は中世城館

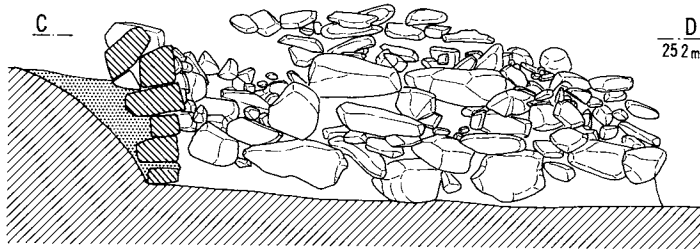
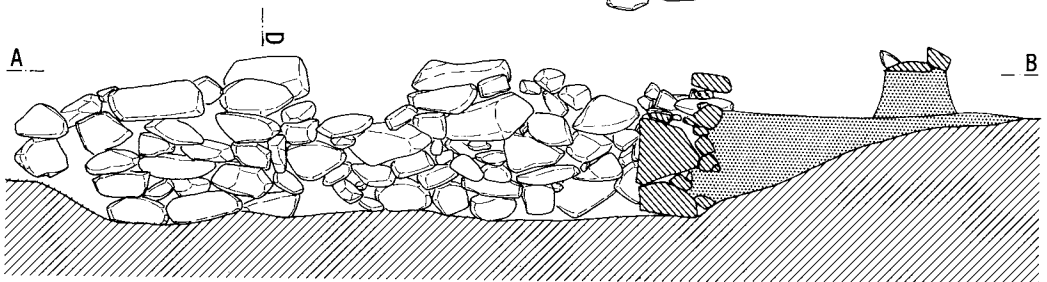
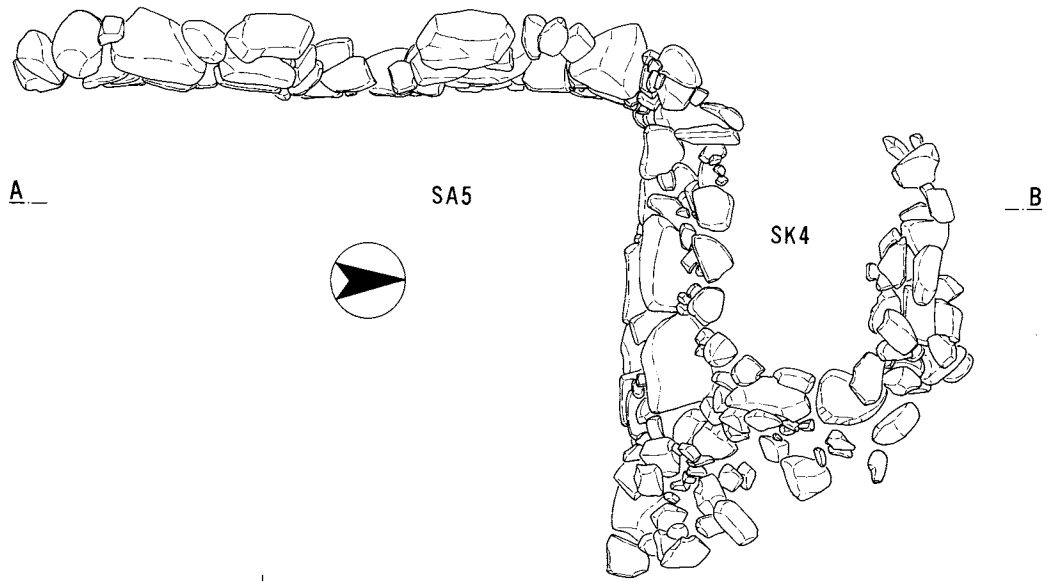
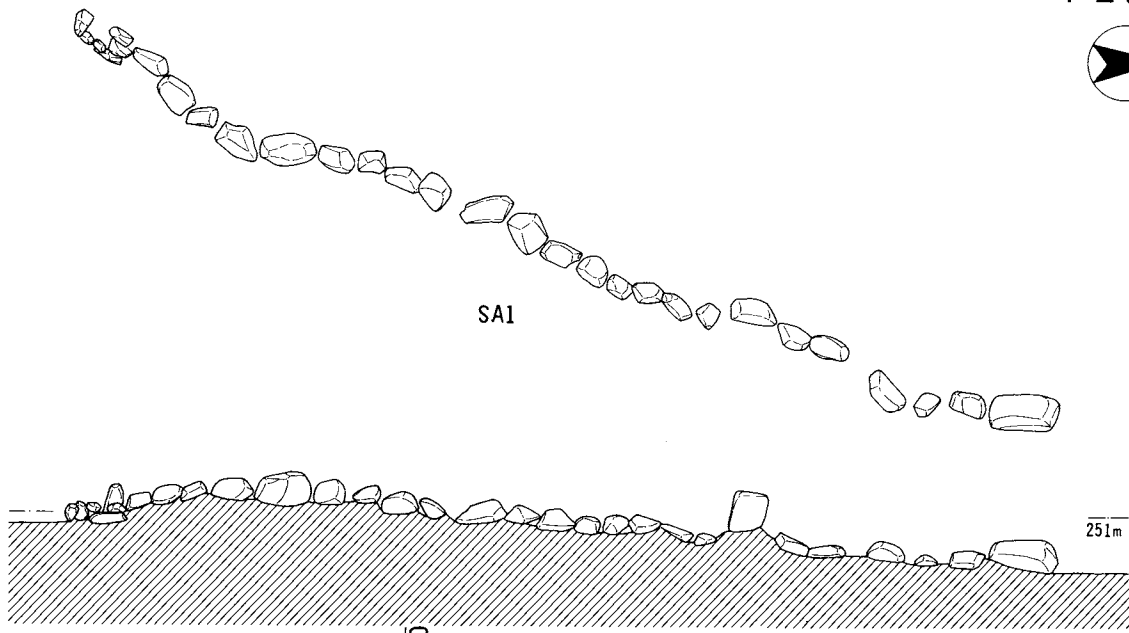


福地城地形図 (1 : 6000)



福地城測量図 (1 : 1000)

PL 3



SA1; SK4・SA5実測図 (1:40)

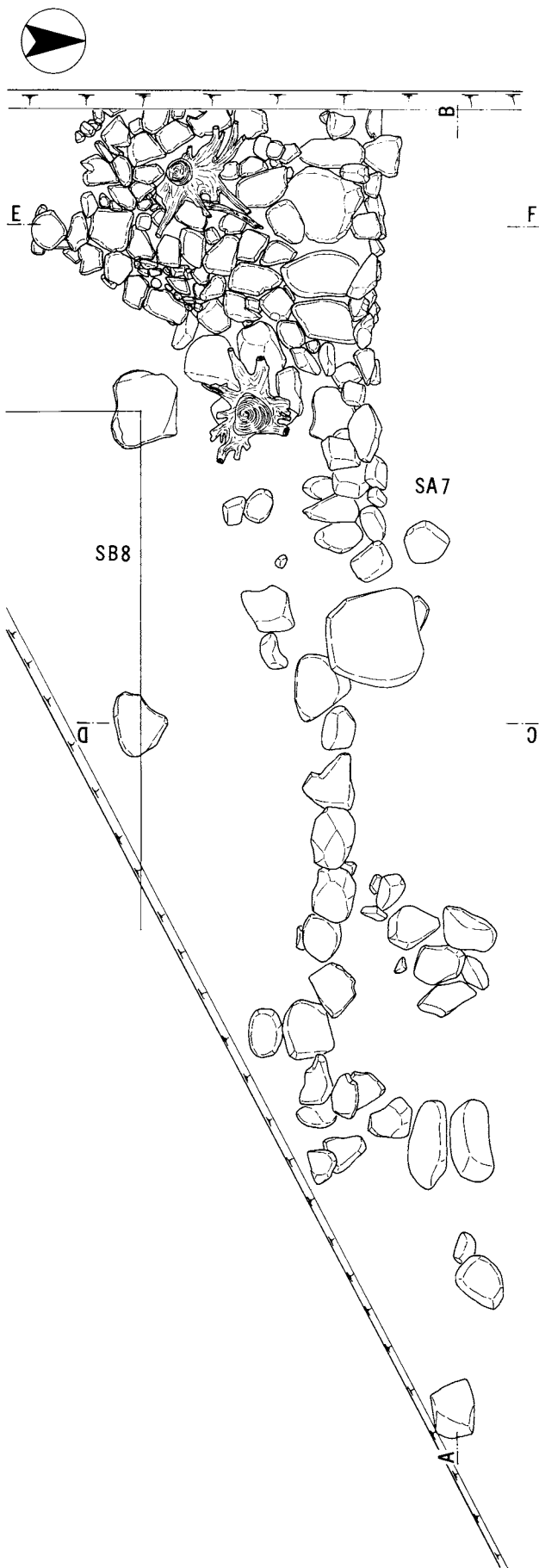


PL 4

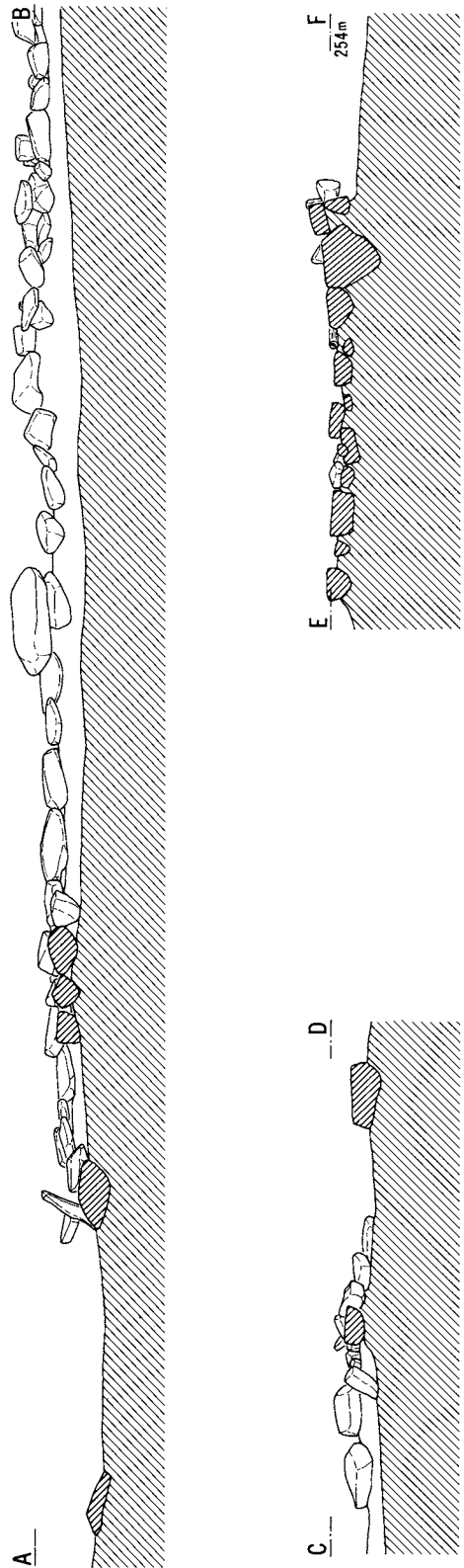


SA 2・SX 3 実測図 (1:40)

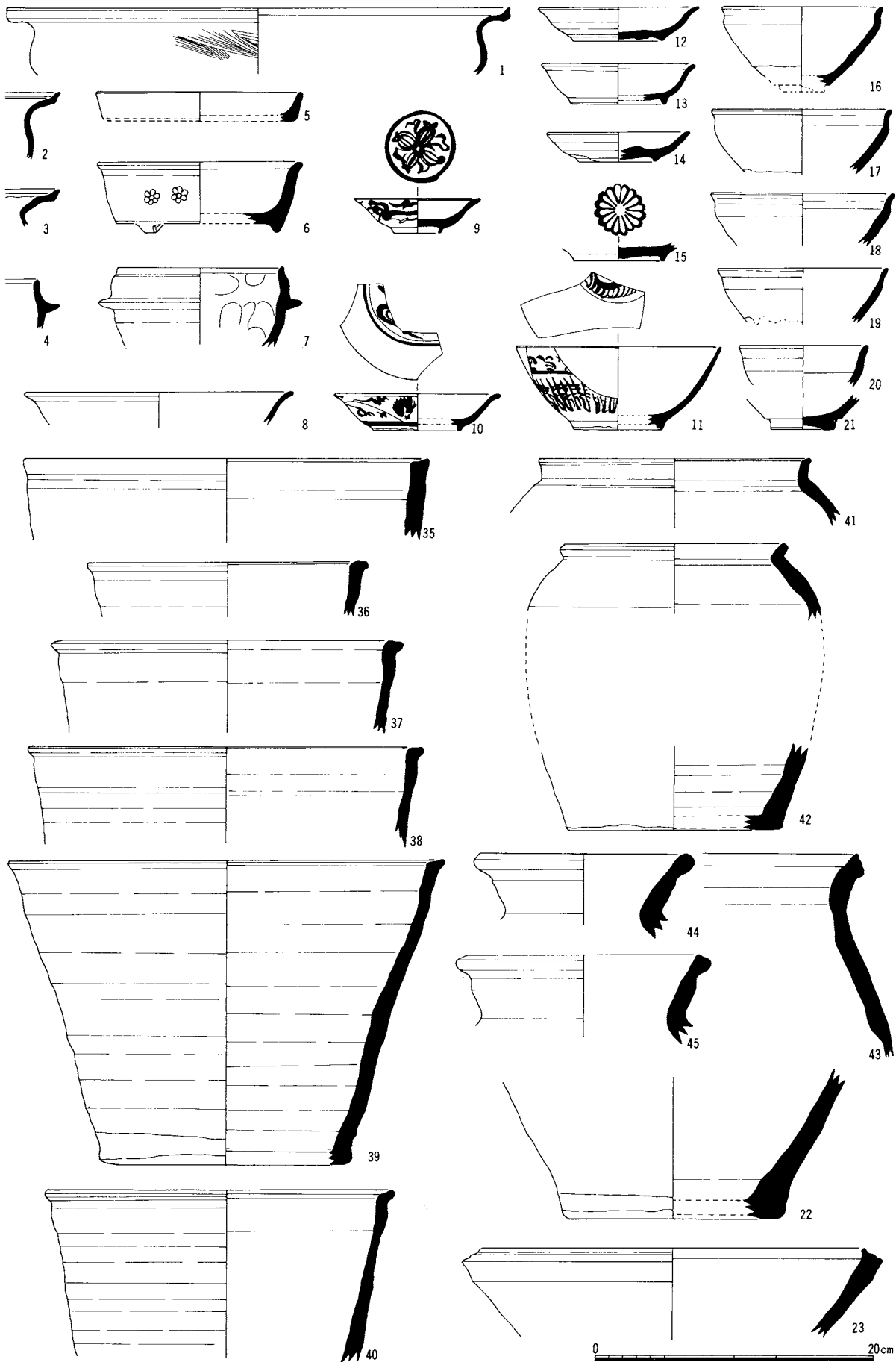
0 2m



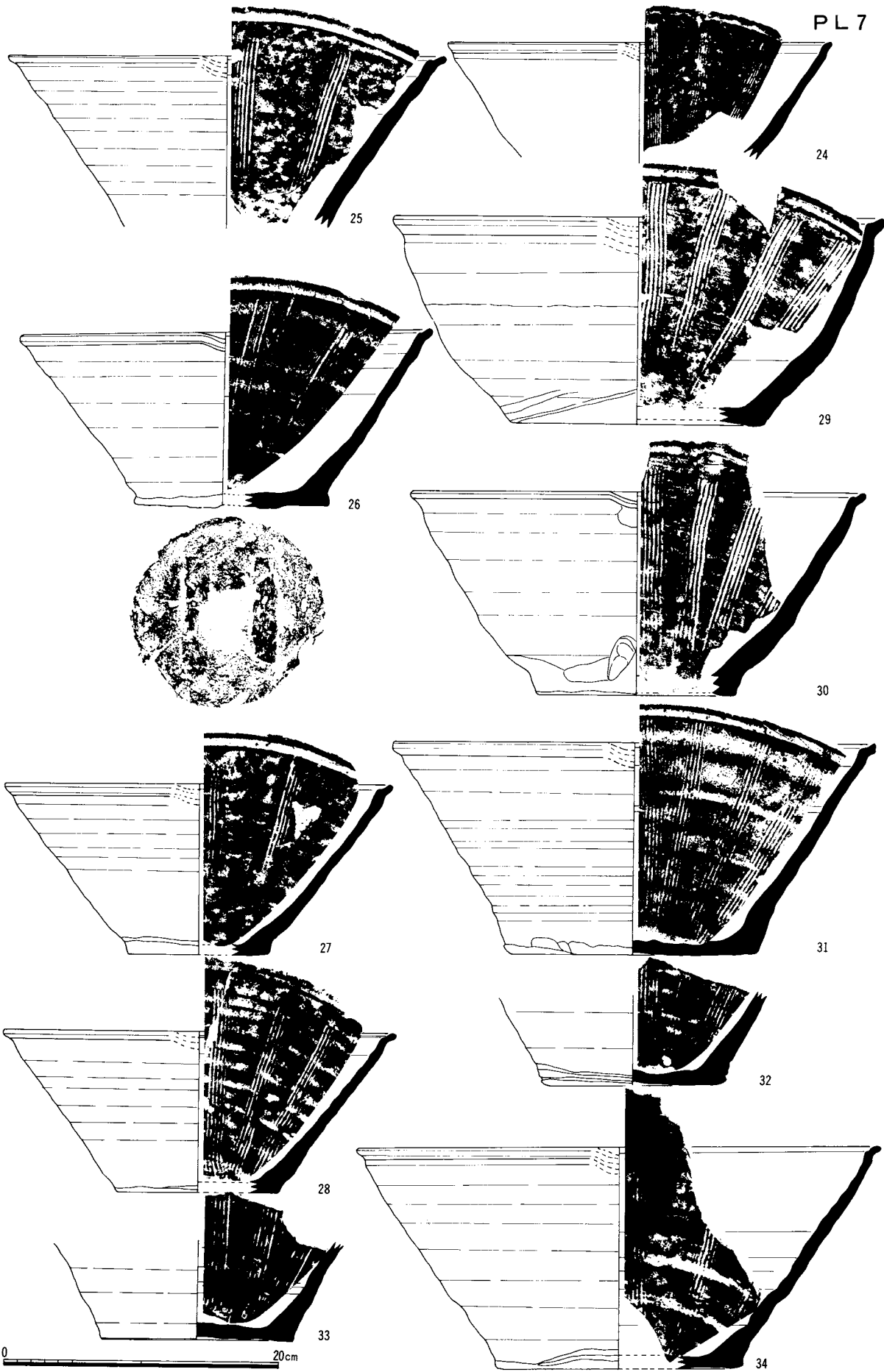
SA7・SB8実測図(1:40)



0 2m



遺物実測図 (1 : 4)



遺物実測図・柘影 (1 : 4)



福地城航空写真



福地城遠景（北）



福地城全景（西）



大手門石垣全景（西）



大手門北側石垣（南西）



調査前近景 (南)



調査後近景 (南)



調査区全景（北）



調査区全景（東）



S A 2 (北)



S X 3 (北)



S X 3 (東)



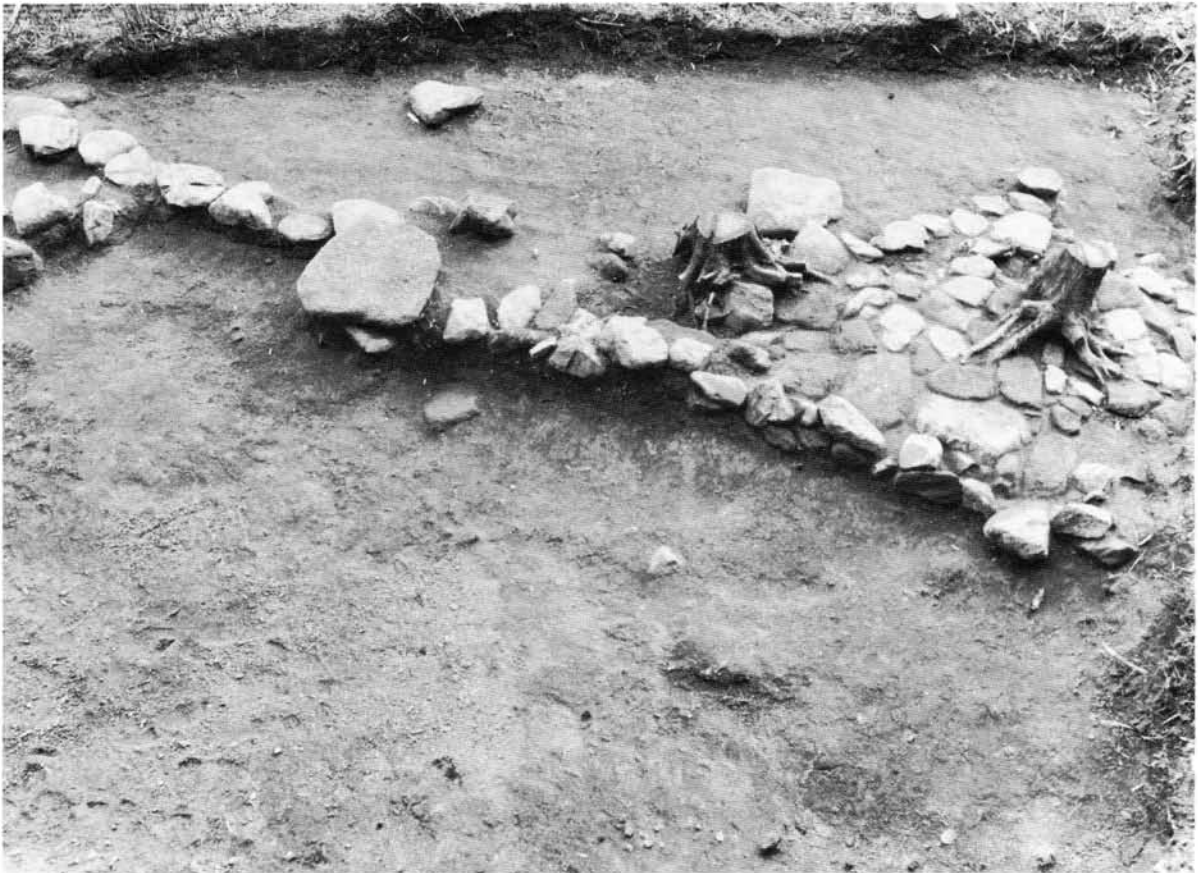
S K 4 (西)



SK4・SA5 (南)



SA5 (東)



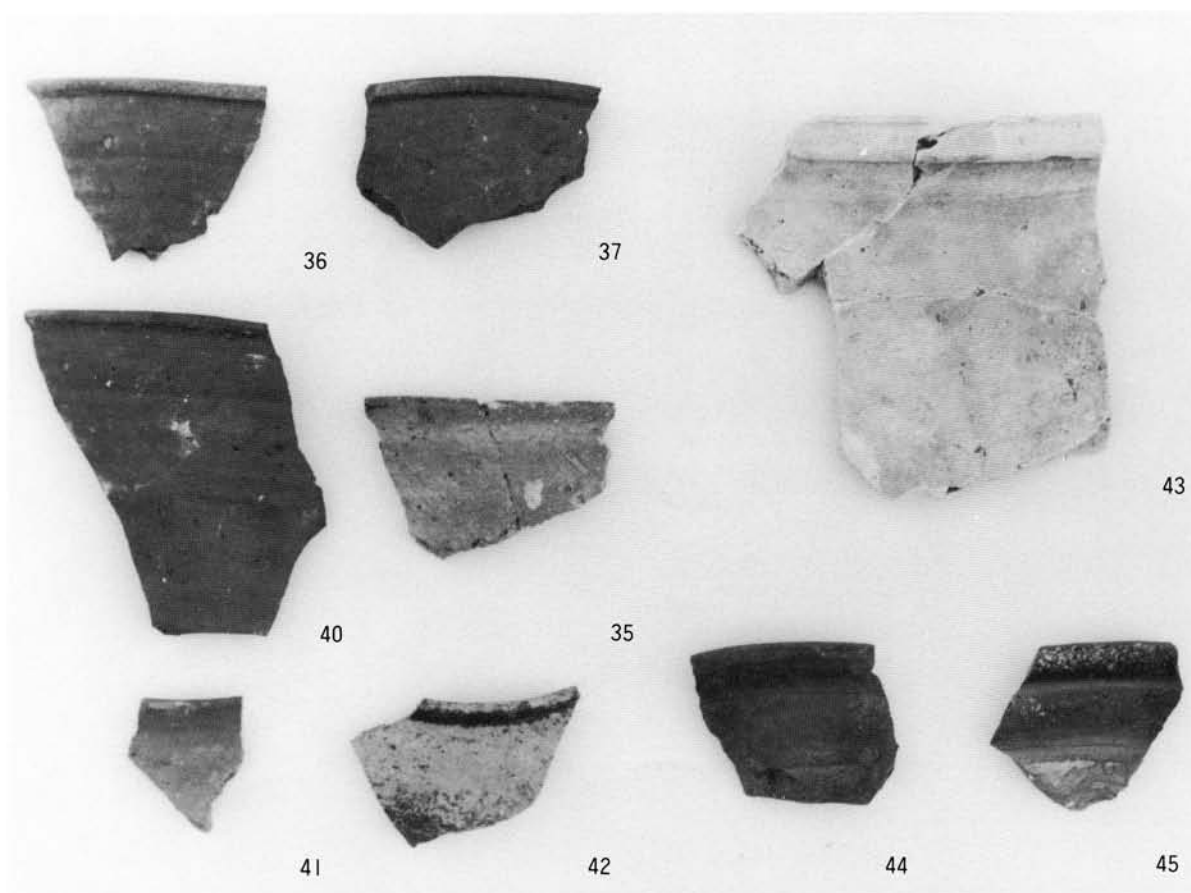
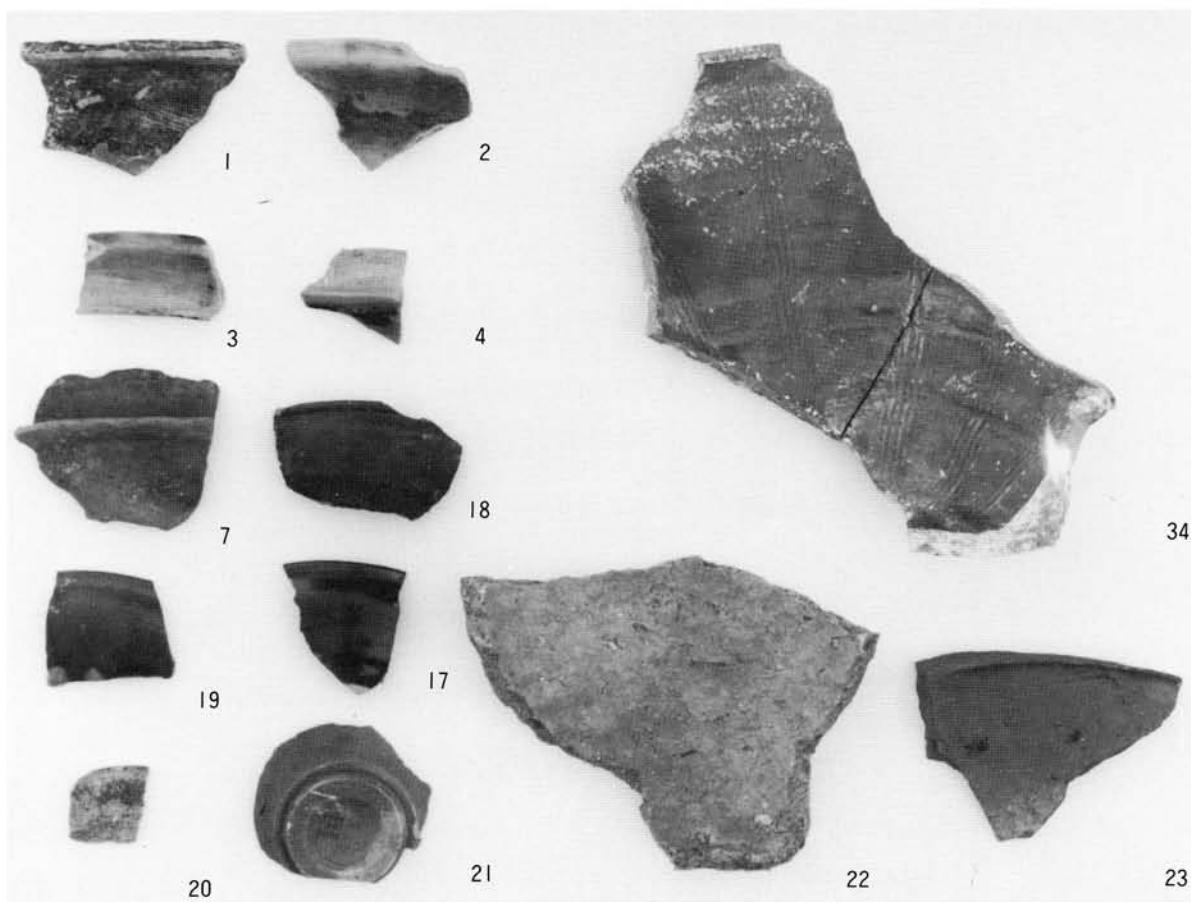
SA7・SB8 (北)



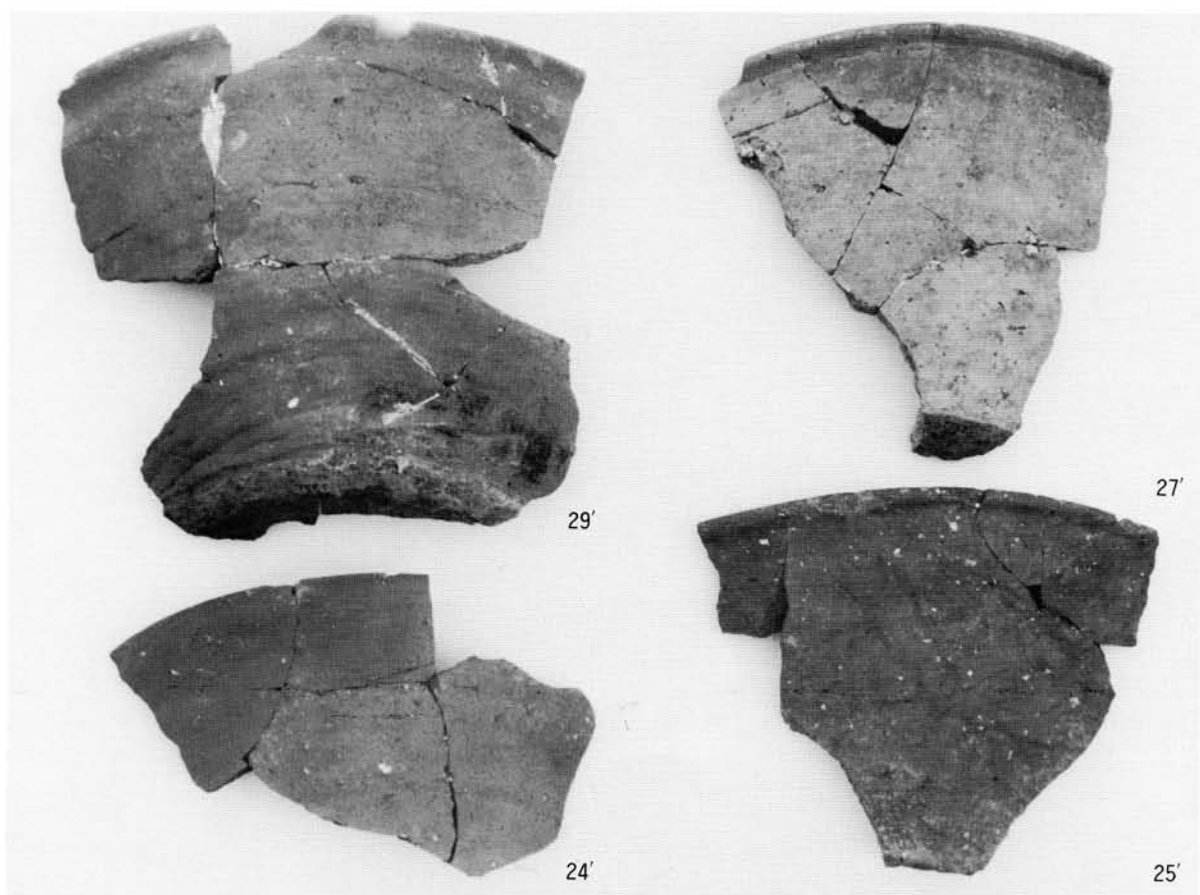
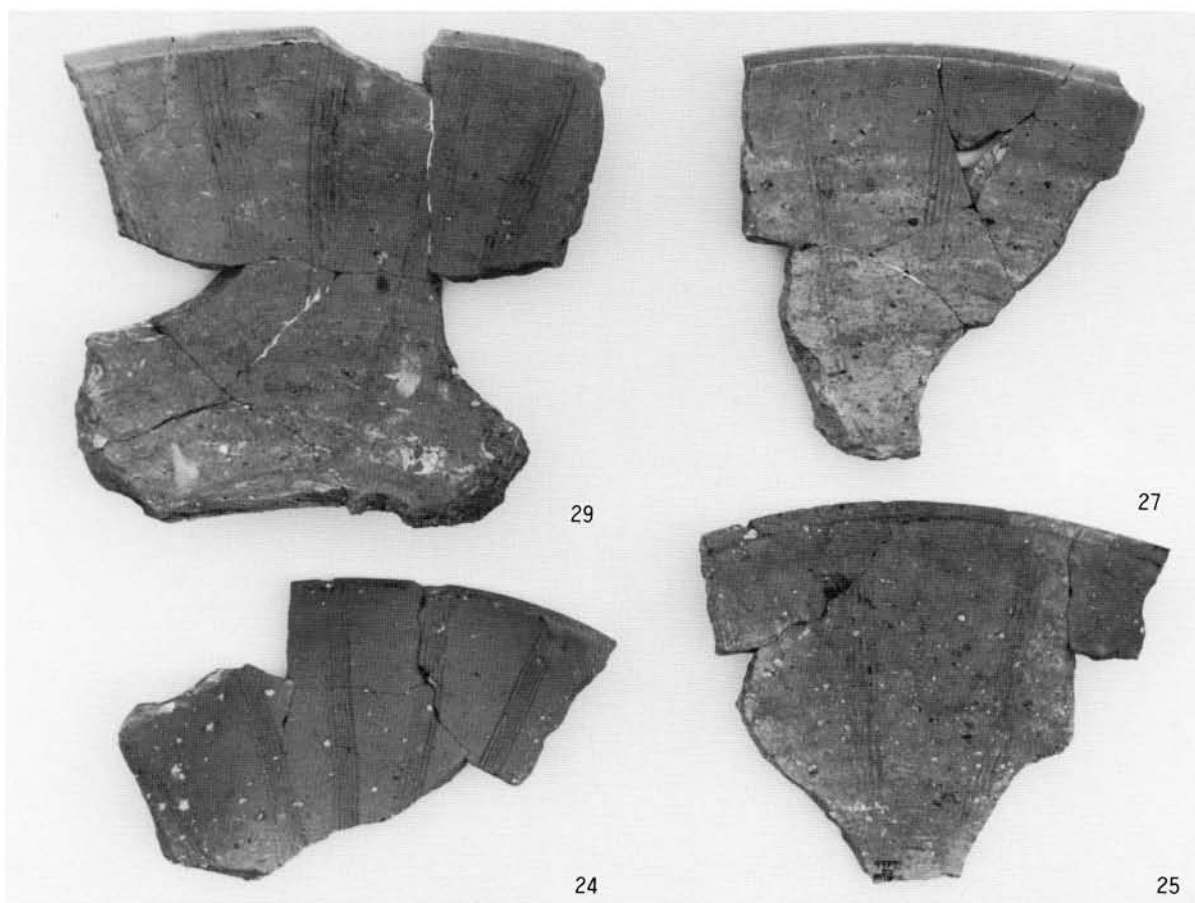
SA7・SB8 (東)



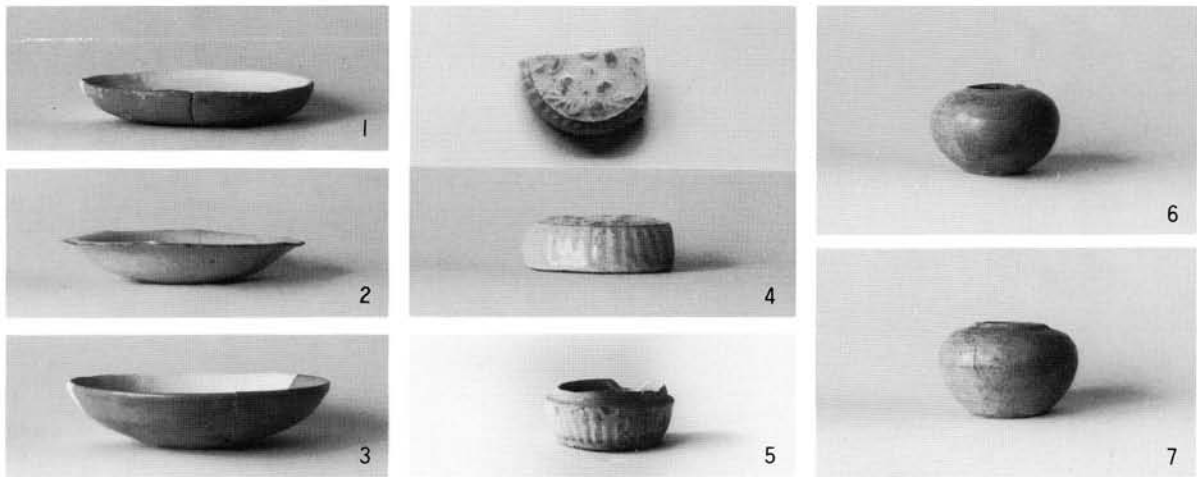




出土遺物 (1 : 3)



出土遺物 (1 : 3)





8



9

昭和57(1982)年2月に刊行されたものをもとに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 59

福地城跡発掘調査報告

昭和57年2月15日

編集 三重県教育委員会
発行
印刷 光出版印刷株式会社
